

御言葉に網を降ろす

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 5章 1～11節

イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。

そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間と合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

[序] 信仰とは「賭け」である

17世紀のフランスに生きた、有名な数学者であり、またキリスト者であったパスカルは、「信仰とは賭けである」と言いました。「賭ける」ということですね。パスカルはとても理性的な人でした。その彼が「信仰とは賭けである」と言ったのです。少し乱暴な響きを感じるでしょうか？ けれどもこのことは、キリスト教信仰の本質だと言っても良いのではないかと、思います。今日のルカ福音書の物語の記事も、正にそのことを私たちに教えてくれている気がします。4～5節を見て下さい。

(イエス様は)話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。

イエス様はこの時、ある意味、シモン・ペトロが全く想定していなかったようなことを命じました。ペトロは、その言葉に「何を言っているのですか、イエス様」と言ってやり過ごす事も出来ました。けれども、彼はそうはしなかった。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と、舟を沖に向かって漕ぎ出し始めたのです。この「しかし」が、「賭け」ではないでしょうか。そしてそれが「信仰」なのではないかと、改めて思わされます。

[1] 御言葉の力に押し出され

この時、ペトロは信仰がとても篤かったのでこの主の呼びかけに応えることが出来たのでしょうか？ そうではないと思います。私は、これはイエス様の**御言葉の力**、その「呼びかけ」の力の強さなのではないか、と思います。丁度、種の中に、やがて実を結ぶいのちが隠されているように、御言葉には私たちを押し出す力が宿っているのです。

そもそも、この記事は、「神の言葉」をめぐる物語として始まっています。

「イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。」(1 節)

「神様の言葉を聞こうとして」とありました。群衆たちは飢えていたのです。自分を生かす神様の言葉に。そして、このイエスという人から発せられる言葉は、他の誰が語る言葉とも違う。このお方は、私たちにまことの神様の心を余すところなく示してくれるお方だと思ったに相違ありません。

そこ、**ゲレサレト湖畔(ガリラヤ湖畔)**に、漁から戻ってきて、まだそう時間も経っていないシモン（ペトロ）たち漁師もいて、網を洗っていました。徹夜の漁が徒労に終わった疲れがあったことだと思います。それは言うてみれば、彼ら漁師の**日常の一コマ**でした。そのような中で、イエス様は、シモンの持ち舟にお乗りになって、その舟に座りながら、湖の岸にいる群衆に向かって、神様の御心を語られたのです。勿論、マイクもスピーカーもありません。舟の中から大きな声で語られるイエス様の声を、シモンは、体は眠たかったかもしれませんが、目が覚めるような思いで聴いていたのではないかと想像します。**何か**が彼の心をとらえました。ですから彼は言えたのだと思います。イエス様の「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい**」の呼びかけに、「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と。

「わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした」。—これは疑いようのない「事実」です。けれども、シモンは、「**しかし、お言葉ですから**」と言えたのです。それは、あるがままの現実の中で、現実には背を向けるのではなく、それに抗（あらが）ってでも神様の言葉の方を選び取る、という決断、選択です。その結果、神様は何を見せて下さるのか。「おびただしい魚がかかり、網が破れそうにな」って、仲間の舟の助けも借りなければならぬほどの大漁、つまり人間の頭脳を超えた、溢れんばかりの**圧倒的な恵み**を見せて下さるのです。

この**神様の驚くべきみわざ**に触れる時、人間は**罪の告白**に導かれます。いかに自分が**傲慢な者**であったか。神様を信じているようで、実は信じていたのは自分自身だった、神様の言葉など二の次・三の次にしていた**自らの不信仰の真相**を知らされるのだと思います。シモンもここで言いました。

「シモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。(8節)

—その前は、彼はイエス様を「先生」(5節)と呼んでいました。けれどもここでは「主よ」と言っています。彼は、覚悟したと思います。自分は審かれても仕方がない存在だと。しかし、イエス様は彼を断罪しません。それどころか「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」(10節)と彼を励まし、神様の使命を、この彼の悔い改めの場所で与えるのです。何という大きな愛でしょうか！もうここには既に、イエス様の無償の赦し、十字架による赦し先取りされていると思います。

[2] 「すべて」を捨てて従っていく

「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」。不思議な言葉ではないでしょうか。しかも、たった今この時からと言うのですね。「今」とは、悔い改めた今、イエス様の赦しを受け止めた今、です。これまでは魚をとる漁師だったシモン・ペトロが、人間をとる漁師になる、と宣言します。「人間をとる」とは、「人間を殺す」ということではなく、逆です。「人間を生かす」者とあなたはなるのだ、と言います。それは、真に人間を生かす方＝主イエス・キリストの弟子となる、ということです。

私たちがキリスト者とされたということは、ある時、神様の恵みに打たれて、それまで自分の拠り所として握りしめていたものを、喜んで手離す生き方に方向を変えて頂いた、ということだと思います。11節に、「そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」とあります。ある説教者は、このことを、「それまでの自分と訣別することだ」と言い、「すべてを捨てて」という言葉に、「捨てるのはいつも一部ではなく、すべてでなければなりません。自分の心を分割することは出来ませんから」と言いました。本当ですね。私たちは「心」で神様に、イエス様に従っていくのです。「心」がいくつもあつたらおかしい話になりますよね。

そして、イエス様に従う人生とは、神様以外のものを絶対化しない、解き放たれた生き方だと思います。何か道徳的に高い、立派な生き方をしていくということが主眼なのではなく、真に自由な人間として、偏見や差別で人と接するのではなく、私もあの人「赦された罪びと」同士と捉え、しなやかに生きていくことではないかと思えます。具体的に神様を愛し、また、出会った人を自分を愛するように愛することです。そしてこれは、私たちの日常生活の中での、神様からのチャレンジだと思います。決して簡単なことではありません。私も本当に身近な人を愛せない自分を発見し、ジレンマに陥ることがしばしばです。きっと挫折の連続だと思います。けれども今日の物語は、「御言葉を語って下さった方を信頼して、その御言葉の上に網を降ろして、沖へと舟を漕ぎ出さない。そこには必ず祝福がある」と、主は私たちに語ってくれていると思います。

[3] 教会の「沖へ漕ぎ出す」歩み

私は最近、ある地方教会の牧師先生のお話のインタビューを聞く機会がありました。私はそのお話から「沖へ漕ぎ出す」という今日の話の思い起こしたのです。その牧師先生のお話を少しご紹介したいと思います。秋田県の男鹿市にある一つの教会です（日本基督教団）。教会員は10数名です。その教会が今から4年ほど前に、教会から程近い所で売りに出された、もとは縫製工場だった物件を買って、教会の集会所として登記し、名前を「オレンジハウス」と付けて、多目的に用いているということです。教会員の数も多くないのに、維持費もかかることなので冒険でしたが、教会の総会でその購入を決定したのです。それは、その教会の女性牧師（そこに赴任して3~4年経った時）の「ここで何かが出来るとはではないか」という思いから始まったのです。

と言いますのは、その先生が秋田県に遣わされて驚いたのは、その当時も秋田県は20年位自殺(自死)率が全国ワーストワンだということでした。ですから、自殺予防の働きと言うのは、もう行政も民間も学校も真剣に取り組んでいる地域なのです。ある時、自分の教会からも薬を沢山飲んで自殺未遂を図り、病院に運ばれた方が出て、この地域にある教会として、真剣にそのための取り組みに参加したいと思いました。そこで、その「オレンジハウス」を用いて、自殺予防の「メンタルヘルス・サポーター」の講習会を継続的に開くようになりました。教会員や、付属幼稚園の先生方にも参加してもらい、また、地域の方にも呼びかけました。

また、男鹿市は、高齢化率も全国的に非常に高く、介護に回せる予算もとても厳しい状況である事から、介護予防の観点から、様々な地域で毎週行われる「いきいき百才体操」（全国で広がってきているらしい）の提供場所としてその教会の集会場「オレンジハウス」を使うようになったということです。面白いのは、その集まりをしてみると言っても、冬の時期や農繁期は、一般に人が集まりにくいだけでも、教会に行っている人はほぼ欠かさずに集まるということです。それは、クリスチャンが、毎週集会に参加するという習慣が出来ているからだ、ということです。ですから行政が注目するのです。市の取り組みに貢献してくれていると。そういうことからどんどん派生して、また、地域の包括支援センターとの繋がりや、「認知症サポーター」の講習、また、引きこもりの若者が安らげる場所としての提供など、いわゆる、「みんなの居場所」として用いられてきていると言うのです。

このようなこともありました。ある時、そのような場所でありながら、ある女性が自殺を図り、ぼや騒ぎになってしまった。幸い大事にはならなかったけれども、近所の方に大きな心配をかけてしまった。けれどもその中で、その当該の女性が神様に導かれて洗礼を受けることになりました。近隣の牧師先生が言われたそうです。「良かったですね。そのように、ひとりの人にどこまでも寄り添っていく中で、教会は教会になります。牧師は牧師に、クリスチャンはクリスチャンになります」と。

この秋田県の女性牧師は、60才位だそうです。とても落ち着いた方です。そして、とても熱いものを内に持った方だと思いました。こうおっしゃるのです。「**私たちの頭の中の青写真ではない。神様のご計画がきっとあるはずだ。聖霊の導きの中で、幼な子のように従って生きたい**」と。とても教えられました。

—イエス様は、ペトロに言われました。「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい**」と。この言葉に従った時に起こることがあるのですね。それは、私たちの想像を遥かに超えた神様のみわざ。網が破れそうになるほどに！それはペトロ一人では担いきれないほどの祝福です。ですから、それを仲間で受け止め、また、その祝福を周りの者たちと分かち合うのです。それが「**教会**」=信仰共同体、ということではないでしょうか？それは、神様がお語り下さった言葉に従うこと、つまり神様の言葉に「賭ける」ことの中で与えられる祝福なのだと思います。

[結] イエス様が先立って下さるから！

これからの教会は、これまで通りのやり方や考え方でやっていける部分と、そうではなく、「**計算出来ない**」部分があると思います。計算出来ないと確かに不安です。けれども、人間の計算、皮算用だけで進んでいたら、それで「**信仰に生きる**」と言えるのかどうか。——「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい**」と、主は私たち川越キリスト教会に対して、また、私たち一人ひとりに対して言われています。チャレンジをして下さっています。

「沖」とは、計算できる「浅瀬」ではなく、「深み」です。足がつかないところです。未経験で、不安で、恐ろしさを感じます。でも、他の誰でもなく、**イエス様が**そこへと進んで行きなさい、と言って下さるのです。私たちに先立ち、**十字架への道を歩み、私たちをとことん愛して十字架で身代わりになって下さり、その後、私たちに永遠の生命を約束するために復活して下さったこのお方が、「恐れずに、沖へ漕ぎ出せ」と命じて下さっているのです。**

私も今、本当にこの**チャレンジ**を受けていると思っています。まだ牧師とされて一年経っていないのです。説教も、牧会も、教会の様々なことがらも、当然ですが、神学生だった時とは全く違う重みを感じ、果たして自分はやっていけるのだろうか、と時々恐くなります。「主よ、わたしから離れてください。私は罪深い者なのです」と叫んだ**ペトロの気持ち**が少し分かるような気がしています。

そして教会も、いろんな意味で今、新しい**チャレンジ**を受けているのではないかと思います。5年はすぐに経ってしまうでしょう。けれども、10年後、20年後の川越教会はどうでしょうか？それを見据えながら、今私たちは何を一番大切にすべきか。それこそ「**教会が教会になって行くために**」外してはならないものがあると思います。私は二つのことだと思います。一つは、**人間をとる漁師になって、本当にお互いを生かし、受け入れあうこと**。大きな**チャレンジ**です。もう一つは、**沖に出て、御言**

葉を語って下さる方を信頼して、その御言葉の上に網を降ろすことではないかと思えます。御言葉は「種」です。そこには命があります。下には根を張り、上には時が巡れば果実を実らせて下さいます。神様が見せて下さるみわざを楽しみにしながら、この年、ご一緒にこの舟を、恵みの深みへと漕ぎ出して行きましょう。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、

どうぞ、大胆にあなたを信じ、あなたに従っていく信仰を与えて下さい。そしてあなたの御言葉に深く根を下ろす心を私たちにお与え下さい。私たちは日常生活の中でも、すぐに不安に陥ってしまいます。そして、これまでの自分の経験だけで頭で計算し、「これで良い」とか「これではダメだ」と判断し、あなたの言葉を聞かないで生きてしまいます。どうぞその愚かさをお赦し下さい。しかし、あなたは、こんな不信仰な者に向かって、「沖へ漕ぎ出し、網を降ろしなさい」と命じて下さいます。私の言葉を信頼しなさいとおっしゃって下さいます。私たちの内に良き志を与え、それを育て、成し遂げて下さるのはあなたです。どうか、二心でなく、まっすぐにあなたを仰いで生きていくことが出来ますように。

私たちの日常を、あなたの御言葉によって引っ張って行って下さい。そして、「人間をとる漁師」として下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。